

## サンフランシスコ湾岸地域のゼロウェイスト動向 ～現地視察及び情報交流を通じて～

池田こみち（環境総合研究所）、青山 貞一（武蔵工業大学環境情報学部）

注）本報告は、2008年3月のカリフォルニア州視察調査をもとにとりまとめたものである。写真はいずれもその際に撮影したものである。

### ●訪問先1：サンフランシスコ市 City of San Francisco

サンフランシスコ市はベイエリアでも最も早くゼロ・ウェイストに向けた取り組みを始めたリーダー格である。人口およそ 80 万人の同市は、カリフォルニア州法が定めた目標（リサイクル率 50 % 達成）を実現するため、いち早く条例を制定し、2010 年までに 75 % のリサイクルを実現することを義務づけ着実な取り組みを開始した。既に事業系一般ごみについては、その目標を達しているという。今回は、サンフランシスコ市の担当者を訪ね、直接その意気込みと現状を取材した。

担当者：環境・廃棄物・リサイクル・ゼロ・ウェイスト部門調整官 Kevin Drew 氏  
ヒアリングテーマ

- (1) サンフランシスコ市の廃棄物・リサイクル政策、施策の歴史
- (2) サンフランシスコ市のゼロウェイスト政策と具体的実践
- (3) 脱焼却、脱埋め立ての経緯
- (4) 生ゴミ、有機物の堆肥化、各種容器デポジット化、ポリ袋禁止政策
- (5) ゼロウェイスト政策と市民活動支援

埋め立てをなくし、資源をリサイクル・リユースするための仕掛けを怒濤のようにまくし立てる Kevin 氏は、民間の環境 NGO の出身である。今は市役所の職員だが、カナダでもこうした人材の流動性が硬直化した役所の体質を変え、ごみ問題のように市民に密着した政策を進める上でとても大きな役割を果たしているという。

もっとも印象的かつ衝撃的なエピソードは、レジ袋廃止に向けた取り組みである。ノバスコシアでは飲料容器のデポジット制導入をめぐり、大手飲料メーカーが州政府を訴え、最高裁で州政府が勝利したという快挙があったが、ここでは、レジ袋メーカーが市を訴えるという事態に発展した。

結局、市は大手スーパーでのプラスチック製レジ袋の使用を禁止する条例を可決し、大論争となったが、2008 年 3 月 27 日に条例が可決され、よ

うやく決着したようだ。レジ袋禁止条例は、サンフランシスコからはじまり、ボストンやポートランド、フェニックスなど米国各地にも広がり、今やパリやロンドンからもノウハウを求めにくるほど世界的な広がりを見せているという。

そして、成功の秘訣は、なによりもごみの半分近くを占めていた生ごみ（有機物）を分別し、堆肥化を進めたことだ。ノバスコシア同様に、生ごみはグリーンカート、資源物はブルーカート、埋め立てごみはブラックカートの 3 分別を徹底したことである。市役所は仕組みを作り、市民や事業者徹底して情報提供、教育を行い、実際の事業は民間が行うというノバスコシア同様のシステムが機能している。



我々は焼却に依存する日本の実態を説明し議論した。Kevin 氏は「こんなに燃やしている日本はもうどうしようもない！」と頭を抱えて

Kevin 氏へのインタビュー 下を向いてしまった。サンフランシスコ市に「焼却処理」という選択肢は全くなかったのかを尋ねると、彼ははっきり次のように答えた。

「将来、焼却処理という選択肢は残されている。しかし、それは最後の選択であり、それを選ぶ前にやること、やれることがたくさんある。今まで埋め立ててきたごみを分別し、徹底的に資源化を進め、処理しにくい物を減らすこと、それによって埋め立て量を圧倒的に減らすことができ、コストも削減できる。」と。

### ●サンフランシスコのゼロ・ウェイスト政策とは

廃棄物は「出る物だから、処理する」という考え方の元、どんなに費用がかかろうと、どんなに資源が無駄になろうと、日本では収集、焼却、灰の埋立が当たり前のようにつけられている。

サンフランシスコ市では、廃棄物政策の理念と

して次のような方向性を明確に打ち出している。  
以下、市の広報ページより引用（翻訳：池田）

みなさん、何も埋立地や焼却炉に行かない社会、というのを想像できますか。私たちは、それは可能だと考えています。そして、市民・事業者・行政の各分野においてそれが実現できるよう、やれることはすべてやっています。その結果、2010年までに埋立ごみを75%削減、2020年までにゼロ・ウェイスト達成という目標に向けて着実に歩みを進め、現時点(2007年度)で69%まで到達しています。

第一目標の75%削減を達成するためには、消費者の責任をさらに徹底していく必要があります。そして、最終目標であるゼロ・ウェイスト（ごみ・ゼロ）に到達するためには、生産者責任の徹底が求められます。すなわち、製造業者や流通業者は、ものが消費されたあと何が起こるかを考えて商品の設計見直しを責任を持って行う必要があるのです。

サンフランシスコ市内のレストランでは、使い捨ての容器ではなく、堆肥化可能な容器あるいは、再資源化が可能な容器のみが使われるように、ご協力下さい。

●訪問先2：Greenaction <http://www.greenaction.org/>  
議論相手：代表 Bradley Angel 氏他スタッフ  
テーマ：

- (1) サンフランシスコ・ベイ・エリアにおける環境正義 (Environmental Justice) 活動
- (2) サンフランシスコ、米国、世界各地における廃棄物の「脱焼却」、「脱埋立」などゼロウェイストに向けての実践活動
- (3) サンフランシスコ、米国、世界各地における大気汚染、土壌汚染などによる健康被害への環境監視、モニタリング活動の実践状況把握
- (4) GCM (Global Community Monitor) 活動とバークレー地域における具体的活動と方法の状況把握  
West Berkeley Community Air Monitoring Project
- (5) 日米における環境正義、環境モニタリング、ゼロウェイスト

Greenaction は、元グリーンピースメンバーらが中心となって、米国南西部における健康と環境正義を守る闘いを展開してきた NGO である。



米国には「環境正義」ということばがあるが、彼らはまさにその環境正義実現のため、日々闘っているのである。

米国の場合、環境正義の対象となるのは、黒人、アジア系アメリカ人、社会経済的に貧困な人々であり、メンバーもブラッドリーさん以外は皆、マイノリティ系のアメリカ人であった。

一通り、設立の経緯や組織、活動の状況などについて説明を受けたあと、市内の主要なスポットを案内してもらうこととなったが、その前に、ごみ問題についての非常にわかりやすくかつ重要なアニメがあるので、ぜひみてほしいと紹介された。そのアニメのタイトルは、「Story of Stuff」、直訳すれば、「物のお話」、とでも言うのだろうか、多くのスタッフと財団などからの財政支援を受けて、アニー・レオナードさん (Ms. Annie Leonard) が作成したもので、すでに 200 万回以上のアクセスがあり、世界中の人々に見られているという環境教育のためのプログラムでもある。

日本からも誰でも以下の URL にアクセスすれば見ることができる。ただし、PC 用スピーカーをつけ音声がよく聞き取れるようにしてから見て欲しい!!英語の勉強 (リスニング) には最適だ。

<http://www.storyofstuff.com/>

内容は、大量生産・大量消費・大量廃棄の一方通行がどれほど地球上の資源を浪費し、格差を生み出し、環境を汚染しているかをわかりやすく解説したものである。改めて、先進国に暮らす私たちの生活が「物」に埋め尽くされそれに支配されているか、そしてあらゆる「無駄」が地球環境を蝕んでいるかを解いている。

### ●訪問先3：バークレー市の民間リサイクル施設 3R Urban Ore Reuse Recycle Facility

サンフランシスコ市のゼロ・ウェイスト政策は圧倒的に市民の支持を得ている。次に私たちは、「都市鉱山 (Urban Ore)」と名付けられた民間のリサイクル施設を訪問した。そこは、とてつもなく広いがらくた置き場のようなのだが、中に入ると、不用品として持ち込まれたものたちが、整理されて再び商品として並べられている。

恰幅のよい女性 (経営者) が説明に出てきてく



経営者と記念撮影

れた。自信に満ち溢れている。まず、もの（ある人にとっての不要品）がこの“鉱山”に入ってくる入り口から案内しよう、と私たちを連れて行った。そこは、一般市民も家の建替えや引越しなどで不要となったものを持ち込んでくる。また、自社で粗大ゴミを引き取ってくる場合もあるという。持ち込まれたものは、種類ごとに分け、清掃・修理、値段付けを行って、陳列エリアのしかるべきコーナーに並べられる。

屋外には、便器、バスタブ、ドア、サッシ、タイル、ブロックなどがあり、屋内には家具、図書、衣類、家電、台所用品などありとあらゆるものが並べられている。この施設（お店）を始めてからすでに 38 年ほどが経過しているという。



屋外陳列の様子（撮影：青山）

を市役所がこの会社に独占的に与えたことが最初のきっかけとなったという。

最初は夫婦二人から始まった小さな会社だったが今では、従業員 38 名の企業にまで成長し、従業員には健康保険も支払うほどの優良な企業となっている。

バークレイだけでなく、湾岸エリアの市民にとって貴重な資源循環の場となっているようだ。従業員も誇りを持って仕事をしている様子がみられた。たまたま店を訪れたお客（市民）も、お店と経営者のファンだと言い、このアーバン・オールの果たす役割を高く評価していた。

このところのエネルギーの高騰や金属資源の逼迫もあり、金属類特に、非鉄金属は高く売れるため、特別のエリアで厳重に管理されていた。ケーブルなどは、最近導入したというご主人自慢の自動剥離機によって効率的に中の銅線を選別し、資源として販売している。これらは、よりきめ細かく選別すればするほど、高い値がつくのである。

バークレイ市では昔からごみはすべて湾岸エリアに埋め立てられていたが、埋め立てを中止するため、粗大ゴミの回収（サルベージ）の権利

を市役所がこの会社に独占的に与えたことが最初のきっかけとなったという。

最初は夫婦二人から始まった小さな会社だったが今では、従業員 38 名の企業にまで成長し、従業員には健康保険も支払うほどの優良な企業となっている。

バークレイだけでなく、湾岸エリアの市民にとって貴重な資源循環の場となっているようだ。従業員も誇りを持って仕事をしている様子がみられた。たまたま店を訪れたお客（市民）も、お店と経営者のファンだと言い、このアーバン・オールの果たす役割を高く評価していた。

このところのエネルギーの高騰や金属資源の逼迫もあり、金属類特に、非鉄金属は高く売れるため、特別のエリアで厳重に管理されていた。ケーブルなどは、最近導入したというご主人自慢の自動剥離機によって効率的に中の銅線を選別し、資源として販売している。これらは、よりきめ細かく選別すればするほど、高い値がつくのである。

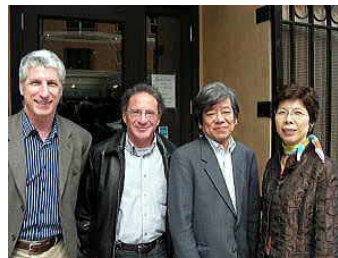
ドア類は狭いエリアに多くを収納しているので、金属類と並んで面積あたりの売り上げに寄与しているという。

会社の土地は、借地のため借地権と税金で、月額 23,000 ドルの経費がかかるとのことだがこの規模のリサイクル施設は市にとってもその目標を達成する上で貴重な存在であることは間違いない。

今では、長年培ってきたノウハウを周辺ばかりでなく、オレゴンなど遠方の地域にも教えに行ったり、また学びに来るとのことで、まさに先駆者としての役割を果たしている。ご夫婦ともとても明るくて元気のよい、ミッションをもった経営者である。彼らに日本のごみ焼却の実態を説明すると、SF 市当局が提案してきたベイエリアへの焼却炉立地計画に対してどのように阻止してきたかを誇らしげに語ってくれた。

#### ● 訪問先4:オークランド市のゼロ・ウェイスト計画

オークランド市の担当者にはランチを食べながらお話をうかがった。彼は市のゼロ・ウェイスト計画案を持参され、それにもとづいてオークランド市のゴミ事情、今後の計画を説明してくれた。オークランドのゼロ・ウェイスト政策案は、先行する隣のサンフランシスコ市のゼロ・ウェイスト政策を見本としたものだが、オークランドはサンフランシスコが大都市で商業と住宅の町であるのに対し、工業・物流・業務を中心としたいわば工業都市であることもあり、住民のゴミ問題に対する意識もサンフランシスコに比べて遅れている。それでもグリーンアクションやガイアといった強力な環境 NGO が近くにあることもあり、廃棄物を燃やして埋める日本のごみ処理とは比べものにならない。



オークランド市政策担当者と  
オークランドにて

現段階では、サンフランシスコやカナダのノヴァスコシア州のように、家庭から出る生ゴミの堆肥化や飲料容器のデポジットなどは取り入れていない。

工業地域でもありアメリカのまちによくある埋め立て処理が中心となっている。

サンフランシスコやバークレイには若干後れを取ったが、これからゼロ・ウェイスト計画の実現

に向けて取り組んで行くとのことで、今後の成果が期待できる。

2006年11月28日に策定されたゼロ・ウェイスト戦略計画によれば商業・業務・物流・業務などの産業廃棄物と家庭系廃棄物を合わせ1990年当時58万トンあった年間のごみ処理量は2005年（現状）に40万トンとし、さらに2010年には30万トン、2015年には15万トン、2020年には4万トンに削減させる計画となっている。

人口約40万人の米国を代表する都市としては、非常に大胆な計画である。ちなみに2005年では、上記の廃棄物総量のうち家庭系廃棄物の割合は33%である。家庭系ゴミのうち単身世帯は23%、二人以上の世帯の割合が10%となっている。

ゼロ・ウェイスト計画では、ゴミの排出削減とリサイクル、3R市場の創造、中小企業リサイクルとそれへの技術支援、廃棄物削減のためのパートナーシップの確立、環境ビジネスの創造、有機物市場の創造などが挙げられている。施策としては、補助金をごみ削減のためのインセンティブに移行させること、製造過程の改善による廃棄物発生量の削減、環境ビジネスの持続的育成、小売業者・消費者への情報提供、ごみ問題・環境問題に強い消費者づくり、製造者責任の強化、資源回収のための土地利用、資源再利用分野での雇用創出などがあり、いずれも工業、物流、業務、商業などを巻き込んだ廃棄物政策となっているのが特徴だ。

そのオークランド市は、現在、生ごみや調理済みの有機物を堆肥化し農家などに提供する堆肥化事業を市内、2～3ヶ所で試験的に開始している。

#### ●訪問先5 GAIA : Global Anti Incineration Alliance

Web site : <http://www.no-burn.org/>

GAIAは世界各地の500以上の草の根団体・NGO・個人が連携するネットワークであり、その究極の目的は、焼却炉を無くして有害物質のない社会を築くことにある。

私たちは、昼食後、ガイアのメンバーであるデーブさんの案内で産業都市のオークランドからカリフォルニア大学バークレー校で有名なまち、バークレーに向った。というのも、ガイアの代表が私たちに会いたいと言っている、というのである。

後でわかったのだが、その代表は1999年当時、環境行政改革フォーラムが東京で開催した「環境正義」問題に関するセミナーに米国からグリーン

ピースメンバーとして参加していたネール・タングリ氏だったのだ。



GAIAオフィスにて

バークレー市はまさに3万3千人の学生を擁するカリフォルニア大学バークレー校のキャンパスを中心とした学園都市である。そのため、隣接する工業と物流の街オークランドとは異なり、高層ビルはなく、ゆったりとした雰囲気があふれている。木造二階建ての2Fのオフィスでは、ネール・タングリさんと赤ちゃん連れの女性のスタッフが出迎えてくれた。

ガイアはフィリピン、台湾、インドネシアなど東南アジア諸国のごみ問題、とりわけ日本の焼却炉メーカーが日本市場の飽和から、アジア諸国に焼却炉や溶融炉を輸出することにより日本型の燃やして埋める20世紀型（日本型）ごみ処理政策が普及することに強く危機感を抱いている。

もちろん、その他、地球温暖化、気候変動はじめ重金属汚染、大気汚染問題などもターゲットとしている。グリーンアクションがキャンペーン活動中心なのに対してガイアは調査研究などシンクタンク的な機能も備えている。いわば、理論的に焼却主義の問題点を追及している組織でもあり、ERIとも近いものを感じた。温暖化との関係では、堆肥化による温室効果ガスの削減、バイオエネルギー、ごみ発電による二酸化炭素の排出増、CDMによる途上国における排出増などを理論的につめていく必要があるとの意見が一致した。

たとえば世界一のごみ焼却国、日本では、国が市町村に巨額の補助金や特別交付金を出してゴミを燃やし埋め立てる施設、すなわち焼却炉や管理型処分場の建設を推進してきた。その結果、日本は米国を上回る焼却大国になってしまった。さらに日本の重厚長大メーカーは、日本で焼却炉、溶融炉の建設が一段落すると、アジア諸国に焼却炉や溶融炉を販売攻勢を掛けているのである。

わずか2日間のサンフランシスコベイエリアの滞在であったが、行政当局、NGOとの貴重な情報交流ができて、有意義な視察を行うことができた。日本でもゼロ・ウェイスト宣言を行う自治体が増えて欲しいものである。